

忍者市を知る

—忍者の里山を駆け巡る—



今回は「忍者トレイルランニングレース」の実行委員長を務める恵川裕行さんに話を聞きました。

伊賀は大阪・名古屋の中間に位置し、それぞれ車でおよそ1時間の距離であるにも関わらず、多くの自然が残っています。忍者トレイルランニングレースは「この大自然を多くの人に知ってもらいたい」「忍者の心に触れ、健康管理や日常生活のちょっとした刺激になれば」「多くの人々が伊賀に訪れ交流の場を作ること、地元地域の活性化を図りたい」そんな思いから始まりました。

伊賀には、戦国時代を感じることができる中世城館跡が多く残り、忍者たちが修行したであろう山々が里を囲んでいます。コースにもなっている霊山山頂には、かつて巨大寺院があり、現在でもその跡が残っています。そんなコースを走りながら伊賀の雰囲気を感じてもらえたらと思います。

このほか、山だけでなく集落もコースとなってお



り、地域の人に協力いただきながら、オール伊賀でレースを開催し地域の魅力を発信しています。

また、世界的に「NINJA」がブームとなっていることから、「忍者」と名のついたこのレースを海外の人たちに興味を持ってもらい、海外から多くの参加者を迎えるレースにしたいと考えています。

世界で唯一忍者修行のできる忍者トレイルランニングレース。皆さんも参加してみたいはいかがでしょうか。

伊賀市は「忍者市宣言」を行い、伊賀流忍術発祥の地として、観光誘客やまちづくりを進めています。以前からの取り組みだけでなく、「忍者トレイルランニングレース」のように忍者を生かした新たな取り組みも進んでいますので、皆さんもぜひ、さまざまなイベントに参加してみてください。

【問い合わせ】

観光戦略課 ☎ 22-9670 FAX 22-9695

伊賀の歴史余話

3

献上された伊賀の鶴

鶴は、古くから長寿や吉兆を象徴する鳥とされています。江戸時代には全国的に生息し、伊賀地域にも多くの鶴が飛来していました。

藤堂藩の記録である『斤事類編』によると、寛政元（1789）年、柏野村で鶴が巢を作ったため、鉄砲の積古が中止になっています。また、文化4（1807）年には、四十九村に飛来した鶴が飛べなくなっていることが藩に報告されています。同様の報告は、4年後に朝屋村でもなされています。

こうした藩の記録に、鶴の記事が多く見られるのは訳があります。江戸時代の武家社会では、縁起の良い鶴が、鷹や白鳥などともに贈答品として珍重され、食用や薬用に用いられていました。大名の居城や家紋などを収めた紳士録『大名武鑑』を見ると、全国の250を越える諸藩の中で、19の藩が定例として鶴を幕府へ献上しており、その中に藤堂藩も含まれています。

藤堂藩の記録『公室年譜略』の明暦2（1656）年9月の記事を見ると「伊州ヨリ初鶴到来ニ依テ管等例ノ如クニシテ翌十二日將軍家へ献上」とあります。また、寛文9（1669）年10月の記事にも、伊賀から黒鶴3羽を將軍家へ献上した

とあります。

藤堂藩による鶴の献上は、幕府だけでなく、朝廷にも行われていたようで、前関白である近衛信尋が二代藩主藤堂高次へ宛てた礼状が残されています。この礼状によると「初鶴一箱」が、院御所（上皇）へ進上されたようです。この献上された鶴もまた、伊賀で獲れたものであったのかもしれない。

幕府や朝廷への献上品であった鶴に関する情報は、藤堂藩にとって重要な事柄でした。そのため、狩猟が厳格に制限されるとともに、事細かな情報が藩に報告され、『斤事類編』などの藩政記録に残されることになったと考えられます。



▲近衛信尋書状（石田三郎左衛門家伝来文書）

総務課歴史資料係
☎ 52・4380

FAX 52・4381